小児科医・平井信義の「自由保育論」再考

○鈴木康弘（東京大学大学院・学生）

本報告は、小児科医・平井信義（1919～2006）が提唱してきた自由保育をめぐる議論の展開を、平井の残した文章や著作を通じて明らかにしようと試みるものである。

平井は、1941 年に東京帝国大学文学部ドイツ文学科を卒業した後、東北帝国大学医学部に学士入学し、1944 年に卒業する。戦後、1949 年からは、お茶の水女子大学の助教授・教授を経て、1970 年から 1990 年にかけて大妻女子大学にて児童学の教授を務めた。1990 年の「保育所保育指針」の改訂の際には、平井は、保育所保育指針検討小委員会の委員長を務めており、その前後には、改訂の趣旨を伝えるためにさまざまな研究会や雑誌を通じて、「子どもの自主性」や「子ども中心主義」の理念の重要性を主張してきた。ただし、平井の提唱していた自由保育は、その当初から、しばし混同されがちな放任保育と異なるものとして、既存の保育のあり方に対する批判とともに構想されようとしていた。本報告は、平井が残した自由保育を取り上げた著作を読み直すことで、平井が目指していた自由保育の理想とそれを支えた理論を明らかにしていきたい。

小児科医としての平井は、母親や教師たちに向けたさまざまな育児や教育を論じた啓発書を執筆することで広く認知されることとなった。1950 年代後半から『読売新聞』を中心として育児に関するコラムを執筆しており、『「心の基地」はお母さん：やる気と思いやりを育てる親子実例集』（企画室、1984 年）は、140 万人以上のお母さんに読みつがれるなど、平井による代表的な育児書の一つとなっている。「スキンシップ」という造語や「しつけ不要論」などの個性的な育児論を広めたことでも知られている。

また、小児科医としてキャリアをスタートさせながら、子どもの精神活動に関心を寄せていった平井は、登校拒否や非行、ノイローゼなどの子どもたちに対する臨床経験を積み重ねていく。特に、日本における自閉症をめぐる論争の際には、当時、まだ主流ではなかったウィーン大学のハンス・アスペルガー（1906～1980）による学説を紹介し、ジョンズ・ホプキンス大学のレオ・カナー（1894～1981）の理論を支持する慶應義塾大学助教授の牧田清志（1914～1988）など、児童精神医学を専門とする研究者たちと激しい論争を繰り広げたことでも知られている。

平井による自由保育を提唱は、その当初から、幼稚園・保育園の小学校化に対する対抗言説としての側面を有していた。1955 年以降、ベビーブームに伴う幼稚園需要の増加を背景として、教育目標やカリキュラムの策定に熱心な園や保育者たちが増加していく。保育者たちが、日常の保育を構成するにあたって、雑誌や講習会で学んだ教材に囚われていた

り、カリキュラムや課題に縛られている様子は、平井にとっては、保育界の伝統が断ち切られていく危機意識として受け止められていった。それゆえ、平井の自由保育は、一斉保育と対置させられる形で、小学校にみられる詰め込み教育を仮想敵と位置づけることで、説得力が増す理論となっていった。

1970 年代、平井は、自由保育論のあり方を論じるなかで、「子供の活動を中心とした保育案を保育者自身の手によって作るべき」と述べている。保育者とは、子どもの自主的な活動に応じて課題を設定する自由とその責任を有してこそ、自由保育を支える存在となりうる。つまり、子どもと保育者がともに「抑圧からの解放」を経て、それぞれの主体性を取り戻すことが、自由保育を通じて見えてきた理想の保育であったといえよう。

このような平井の自由保育論は、学校的な「よい子」に対する問い直しと結びついている。理想的な「よい子」像の転倒を可能にしたのは、平井の基本的なスタンスである精神分析的な子ども理解と「子どもから学ぼう」とする徹底した臨床・現場主義の姿勢による。通常では、手のかからない子どもが「よい子」とされる傾向があるのに対し、平井は、いたずらやけんかなどの行為に、子どものなかに自主性が芽生えようとするのを読み取ろうとしたのである。平井は、1957 年から毎年夏に、「ひらめ合宿」と名付けた合宿を主催してきた。そこでは、カール・ロジャーズ（1902～1987）によるカウンセリングの重要概念である「受容」や「共感」、さらにはそれらを発展させたバージニア・アスラクライン（1911～1988）の「遊戯療法」の影響を受ける形で、ルールやしつけをできるかぎり無くし、子どもたちが自由に過ごせる場を傍で過ごすことで、本物の自主性の育ちを見守り、その理論化を試みようとした。平井は、これらの理論と実践の結びつきを踏まえて、子ども時代で最も大切なこととは、子どもの自発性を育むことであること、そのために必要なものとして自由が必要であることを、「叱らないしつけ」や「しつけ不要論」などの育児論として、はっきりとわかりやすい語り口で訴え続けた。

平井の自由保育論に対する批判は、さまざまな面から寄せられることとなったが、その論争相手でありながら、平井の主張の真意を読み取ろうとするよき理解者であったのが、長年、桐朋幼稚園で保育者を務めていた大場牧夫（1931～1994）である。大場は、その晩年、平井と自由を語り合う対談のなかで、に対して、「保育する側」の立場から、子どもの育ちを支える手探りのかかわりを擁護しようとした。平井と大場をめぐる議論の争点となっていたのは、保育者による「かかわり」や「出会い」をパターナリスティックな必要悪として捉えるのか、それとも、それ自体に固有の意味を引き取っていくのか、という子ども中心主義の保育をめぐる評価の相違にあるといえる。平井は、子どもの主体性をどのように育むかという近代教育のアポリアに挑み続けるなかで、その答えを自由な保育者による自由保育のなかに見出そうとしたのであった。